

Title	本邦禅林における「李及」像
Author(s)	中本, 大
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1994, 28, p. 19-31
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47839">https://hdl.handle.net/11094/47839</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 本邦禅林における「李及」像

中 本 大

## 序

元代、孫存吾等編『皇元風雅』所収「十雪題詠」詩の題材となった漢・晋・唐・宋の各代に互る故事の中、宋代の人物に材を得たものは、冒頭の「韓王堂雪」、宋学の祖である程頤に取材した「伊川門雪」、歐陽修の禁体詩の逸話に基づく「歐陽詩雪」、及び「李及郊雪」の四詩題である。これらの故事は時代的に鑑みて、本国中古にあっては決して見出せるものではなく、中世五山禅林において独自に獲得された詩材として提唱する必要がある。

本稿ではこの詩題の中、「李及郊雪」を取り上げる。即ち、他の「十雪題詠」詩題の逸話が総て類書である『詩学大成』節序門「雪」項、及び『事文類聚』天道部「雪」門に収載されるのに対し、「李及郊雪」の典拠の故事の目が採録されないなど、問題とすべき点が少なからず存するからである。本邦禅僧はいかにして李及を学んだのか、またその人物像定着の契機に関与した重要な学僧は誰であったのか。以下、題材とされた「李及」の本邦における受容を整理したいと考えている。

「李及郊雪」の題材となった北宋初期の大夫、李及は資質清介、使君（県知事）として杭州赴任中、西湖の孤山に隠遁し俗塵を断っていた詩家、林逋と交際のあった数少ない人物である。その伝記は『宋史』列伝等にも掲載され、その高潔な人柄を伝える逸話は天道部「雪」門ではないものの、『事文類聚』の二門に採録されている。即ち、次掲、退隱部「隱逸」門では「郡守訪隱士」という標題の、李及と林逋との清芬なる交流を伝えるもの、

#### 郡守訪隱士

林逋居西湖。未嘗履城市。杭守李及・薛映造其居清談終日。

また性行部「清廉」門では『夢溪筆談』を典拠とする「恨市白集」の標題で、潔癖な李及が風俗軽薄な地である杭州の市で『白氏文集』を購入したことを生涯の恨みとしたという次の記述である。

#### 恨市白集

李及知杭州。市白集一部。乃為終身之恨（筆談）。

ここに見える二つの逸話は『宋史』の「李及伝」にも採られるものであり、次掲傍線部、『皇元風雅』所収の李蒙

斎作「李及郊雪」詩の典拠もこの二つを超えるものではない。

李及郊雪

李蒙斎

漢土長堤湿絮漫

漢土の長堤湿絮漫たり

使君来扣隱君関

使君来りて扣く隱君の関

天寒誰信五馬出

天寒くして誰か信ぜん五馬の出づるを

湖凜惟随二鶴還

湖凜として惟だ随ふらくは二鶴の還るのみ

林麓清無群從混

林麓清らかにして群從の混じること無く

梅花冷伴二翁閑

梅花冷じくして二翁の閑たるに伴う

他時白集帰舟月

他時白集帰舟の月

別去先生不汗顔

先生に別れ去りても汗顔せられず

結聯、『白氏文集』を購ったことを終生の恨みとしたという李及の高潔さは決して和靖先生に劣るものではなく、恥じるに及ばない」とその為人を讃える点が眼目であろう。

さて、こうした李及の逸事を紹介し、本國禅林詩壇に定着させたのは誰であったのか。本邦での詩例を確認すると、既に別稿で論じた如く、<sup>(1)</sup>本國五山での「十雪題詠」詩定着の重大契機となった惟肖得巖の追和詩は、

李及郊雪

惟肖得巖

欲見橋西林處士 橋西の林處士に見えんと欲し

双旌冒雪試問関 双旌雪を冒して問関を試みる

吟非灞上尤多助 吟ずること灞上にあらざれど尤も助け多く

與似山陰不遽還 與は山陰に似たれど遽かには還らず

梅骨故欺人俗瘦 梅骨故に欺く人の俗に瘦せたるがごとく

鶴身長為客稀間 鶴身長く為りぬ客の稀なる間

数峰玉立当湖面 数峰玉立し湖面に当ひたれば

精爽応思二老顔 精爽思ふべし二老の顔

〔東海瓊華集〕

という七律で、第二聯、「十雪題詠」の詩題にも採られた鄭肇や王子猷の逸話には言及するものの、前掲の李及の故事の中、「恨市白集」に關しては全く触れていないのが注目される。だが、惟肖と同時代の西胤俊承の同題の七絶の傍線部、

李及郊雪

西胤俊承

鶴飛湖上雪初晴 鶴湖上に飛びて雪初めて晴る

誰信使君遙出城 誰か信ぜん使君遙かに出城すと

白集一舟收印後 白集一舟收印の後も

高風終不讓先生 高風終に先生に譲らず

(『真愚叢』)

を確認するまでもなく、『皇元風雅』原典に倣って二つの逸話を詠み込むことは後代常套化しているのである。そしてその重要な契機となったのが朱熹の篇した『宋名臣言行録』(以下『言行録』と略称)の五山での盛行なのであった。その周辺の事情は、『四河入海』所収、蘇軾の「書林逋詩後」詩に付された注釈により確認される。

「書林逋詩後」詩の抄文で引用される書名の一覧は、

〈一、瑞溪周鳳『脛説』からの引用として記されるもの〉

○『林和靖先生詩集』(梅堯臣・撰)序文

○『東都事略』・『言行録』和靖伝(書名のみ)

〈二、万里集九『天下白』からの引用として記されるもの〉

○『東都事略』隱逸伝百一「林逋伝」

○『東都事略』列伝二八「李及伝」

○『言行録』前集第九「李及伝」

○『宋元通鑑』第三「宋真宗紀」

〈三、笑雲清三が自ら引用したもの〉

○『漁隱叢話』前集二十七・後集二一

○『詩林広記』後集第九

○『詩人玉曆』第一七（書名のみ）

であり、宋代の数多の士大夫の逸話を集成した上、正史にも準ずる『東都事略』に比して比較的簡便な、しかも朱熹<sup>(3)</sup>によって編まれた『言行録』が既に瑞溪の周辺から特に顕著に利用されていたことが知られるのである。『言行録』所収の李及伝の中、『皇元風雅』の典拠に関わる部分は以下の如くである。

公（李及）知杭州、每訪林逋於孤山、望林麓而屏尊從、步入其廬、一日冒雪出郊、衆謂当置酒召客、乃独逋清談、至暮而返、逋死、公以喪服哭送、拜墓乃婦、吳兒自是、恥其風俗之薄也、（晁以道集）

蔡君謨嘗書小吳牋云、李及知杭州、市白集一部、乃為終身之恨、此清節可為世戒（筆談）

惟肖詩の第二句、「冒雪試間関」も引用傍線部の表現に学んだと考えられる。

『言行録』受容史の上では無視できない、『脛説』の講者、瑞溪周鳳はその日乗『臥雲日件録』宝徳三年十二月十七日条の記事に抛り、惟肖並びに西胤に杜詩や蘇詩を学んだことが知られる。<sup>(4)</sup>その中で『言行録』による李及の伝記の紹介も行われ、禅林に流布したことは想像に難くあるまい。

その瑞溪周鳳もやはり「十雪題詠」による連作を成している。「李及郊雪」詩は次の七絶である。

李及郊雪  
瑞溪周鳳

雪裡扣門驚鶴眠 雪裡門を扣きて鶴の眠りを驚かせど

風流不愧隱君賢 風流愧じず隱君の賢なるに

暮寒一榻孤山下 暮寒一榻孤山の下

梅亦開顏頼史天 梅亦開顏するも史天に頼れり

〔臥雲葉〕

起句、「鶴」は「やまどり」を指す。『爾雅』や『拾遺記』等に言及はあるものの、決して頻出する措辞ではない。

結句の「史天」は未詳。後代、横川景三の同題詩にも用いられる詩語でもあるものの、用例を確認し得なかつた。

さて、この瑞溪詩の表現は次掲、南江宗沆の詩例を参照することでその解釈がより興味深いものとなるのである。

李及郊雪  
南江宗沆

湖辺小雪暮紛紛 湖辺の小雪暮れて紛紛たり

隱者柴門清不群 隱者の柴門清らかにして群ならず

吟入梅花無喝道 梅花に吟じ入れば喝道無く

如何鶴亦報州君 如何にして鶴亦た州君に報いん

〔漁庵小藁〕



南江詩では詩題の下に、

五馬臨光鶴舞雲 柴門小雪暮紛紛 乃知封内梅花樹 一半分香属使君

という同韻の、しかも措辞もかなり類似した七絶が附記されており、追和詩であることが知られるものの、その作者は不明。製作契機も未詳である。しかし、この南江詩、韻字も異なり、同一契機の作例とは限定し得ないものの、前掲の瑞溪詩との関連を無視できないのである。それは単に「鶴」という類例の少ない措辞を共有しているからではない。二詩の解釈に関わってのことである。

南江詩の転句、「喝道」は大夫の出幸に際し、先立ちする先導役である。しかし、『言行録』にもその記述のあった先従役の無いことと結句、「どのようにすればやまどりも州君である李及に恩返しすることができらるるか」というつながりが今一つ明快ではないのである。だが、瑞溪詩の起句の如く、李及の来訪が鶴の眠りを覚まさせるものであったことを踏まえるならば、南江詩の転結句の解釈はより理解しやすいものとなるのである。即ち、「使君である李及の来訪によりその眠りを妨げられたやまどりではあるが、李及の訪問は先導役もない、たった一人だけのものだったのであるから、孤山の静寂を破るに足るものではない。だから、やはり李及の奇特に感謝し、その恩に報いなければならない」というものである。

如上の相関が成り立つとすれば、南江と瑞溪の交友は「李及郊雪」詩という実作を通して確認できることにな

ろう。

南江は言うまでもなく建仁寺靈泉院友社で詩作を学んだ学僧である。しかし友社の中心的存在であった江西龍派の別集には「十雪題詠」はもとより李及を材とした作例は見あたらない。この事実は即ち、「十雪題詠」詩題が惟肖・西胤の周辺から、おそらく講説の場を通じて瑞溪・南江らに伝えられたことを裏付けているのである。

二

「李及」関連の詩題の五山禅林での受容を考察する際、無視できないのは、一休宗純が詩材として用いているという点である。一休の別集『狂雲詩集』には次掲、「孤山和靖図」という詩題の七絶の賛が収められている。

孤山和靖図

一休宗純

孤山天地興悠々

孤山天地興悠々たり

唯有梅花無客遊

唯だ梅花有りて客の遊ぶ無し

李及若吟香影句

李及若し香影の句を吟ずれば

婦舟白集亦風流

婦舟白集も亦た風流

転結句、まさに親炙した李及の故事が詠み込まれているのだが、実はこの詩作も次に挙げる南江宗沅の七絶「読和靖詩」を踏まえて作られたものなのである。

## 読和靖詩

南江宗沅

威平風月事悠々 威平の風月事悠々たり

一臥湖山雪滿頭 一たび湖山に臥せば雪頭に満つ

李及未知香影句 李及未だ知らず香影の句

惟携白集上歸舟 惟だ白集を携へて歸舟に上る

転結句、「李及は林逋の傑作「山園小梅」中の著名な一聯、「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏」を未だ知らなかつたので、『白氏文集』のみを購ひ杭州を離れたのは遺憾であった」というものである。その内容を踏まえると一休詩第三四句は、「だがもし李及が林逋の句を知っていたならば、その清浄なるを認識しつつも一方で輕薄なる白居易の別集も購入したということになり、堅物だとばかり思っていた李及もおもしろい男だったと言うことになり」という解釈が可能になり、『皇元風雅』以来、詩家にとってひたすら賛美の対象であった李及の終生清介を貫いた為人を揶揄した個性的な作として評価し得るのである。

解釈や表現の類似ばかりでなく、二つの詩作は韻も同一であり、追和詩であることは間違いない。実際、南江の別集の一本『鷗巢叢藁』ではこの七絶の詩題を「談和靖詩」としており、南江と一休の言談の場を髣髴とさせる数少ない好例とも見なし得るのである。

「十雪題詠」詩を通じ、簡便な『言行録』の盛行もあって、林逋を詠じる際の詩題として「李及」は確立し、終には画題となるに至る。以下では惟肖得巖・西胤俊承らとは一世代を隔す、後代の詩例を確認したいと思う。

「李及郊雪」の詩題が確認できるのは前述の横川景三の七絶及び、妙心寺雑華院蔵『古宿会詩』所収の詩群のみである。後代の作例は「使君の雪中の出幸」という『言行録』の枠組を脱しない常套的構図に終始しており、その完成度とはかく、発想や措辞の面で一休の如き個性的な作品は見出し難い。その中で、月舟寿桂と景徐周麟の二学僧に各々、「李及雪中訪林逋図」なる画題への賛詩が存在することが注目される。

李及雪中訪林逋図 月舟寿桂

五馬衝寒郭外遊 五馬寒を衝きて郭外に遊すれば

逋仙掃雪笑相留 逋仙雪を掃きて笑ひて相留む

他年一別婦舟月 他年一別婦舟の月

載得孤山梅影不 孤山の梅影を載せ得たるや不や

(『翰林五鳳集』)

李及雪中訪和靖図 東山古桂席 景徐周麟

和靖宅前湖水崖 和靖宅前の湖水崖

有梅曾駐使君車 梅有りて曾て駐む使君の車

解言雪後皆奇夜 言を解すれば雪後皆な奇夜にして

賢主名高蟾窟花 賢主の名は蟾窟の花よりも高し

〔翰林胡芦集〕

特に景徐の作には「東山古桂席」という題注が付されており、建仁寺に住した古桂弘禧の詩席に連なった際の詠作であることが知られる。玉村竹二氏に拠ると、古桂は天隱龍沢に詩文を学んだとのことであるから、門下の尊宿に詩題として「十雪題詠」を課した桃源瑞仙を始め横川・古桂らに親しまれて「李及」が画題として定着していた様が忖度されるのである。

## 結

和靖先生、林逋は中世禅林にあって最も愛され、親しまれた詩人の一人であった。当然、その画像に賛を記す時、類型に墮すことのないよう、様々な工夫が施されたものと思われる。そして、詩材を拡大する際、「李及」は最適なものだったのではなからうか。

林靖と交友のあった人物として、前掲『事文類聚』にも記された薛映や、元代、念常集『仏祖歴代通載』にその伝記の見える中庸子、智円和尚などが知られている。その中で李及への言及は他を圧して多く、その浸透は前述の如く独自の画題を生むにも至っているのである。

李及の名は林逋と共に語り継がれるようになった。その顕著な例は前掲『四河入海』所収、蘇軾「書林逋詩後」

詩への注釈である。蘇軾詩の措辞では決して李及には言及していないにもかかわらず、本邦禅林歴代の注釈書はこぞって李及の伝記を掲げ、その為人を記すのである。そしてその源流には「十雪題詠」の存在があったことは銘記すべきである。しかし本邦禅林での作例を検分するに、李及の高潔のみを称揚するばかりで、積極的に価値の転換を試みたり、新たな対照を行うといった姿勢は看取できなかった。或はそれを許さないほどに林逋以上に『言行録』でも称揚された李及が叢林で尊ばれていたのだ、と結論付けられよう。

## 注

- (1) 拙稿「本邦禅林の「韓王堂雪」詩における李煜詞の受容をめぐって——「五山文学と填詞」続貂——」（『国語国文』平成六年十月号）で「十雪題詠」冒頭の「韓王堂雪」詩に注目し考察している。併せて参照されたい。
- (2) 蘇軾作「書林逋詩後」詩は七言十聯の古体詩。李及に関わる表現は直接には現れていない。
- (3) この他に大岳周崇『翰苑遺芳』からの引用で「和靖先生詩集」では「知鼎李太傅贊」なる一首が収録されているものの、『東都事略』からの抄出である。また梅堯臣撰『和靖先生詩集』では「知鼎李太傅贊」なる一首が収録されているものの、故事に関わる表現はない。
- (4) 十二月十七日、読杜詩二十畢。宝徳元己巳五月八日、於鹿苑寺開講、至今凡三十三月而結局也。予三十三歳寓相国方丈殿中（殿中周顛、席下時、西胤西堂居于考祥軒、講杜詩自一至五而已。予聽此講、爾後西胤居勝定、又講之、自十七至二十。後十余年、就双桂（惟肖得巖）和尚求聽、此講纔五六卷耳、蓋所未聞之卷也。中間聞殿中・子瑜・元璞講、两三卷、或四五卷而止矣。諸老之義、略記所聞、向來為蝦西堂所告皆是也。
- (5) 處士高風不可攀、六橋烟水鬢斑々、梅花雪在史天外、五鳥雪辺一鶴閑（『補庵京華外集』）
- (6) 未だ活字化されていないものの朝倉尚氏より御教示頂いた。
- (7) 『五山文学』（至文堂）参照。